

# 時の霧 – 近江景

安喜 万佐子

パンデミックにより世界中が移動制限に見舞われる中、私は海外でのリサーチを中断し、さらに欧州で戦争が始まるなど混乱の背景もあり、生活圏から比較的近い地域である「近江」に関心を向けるようになった。

まず、古人が「近江八景」を描いたであろう場所に立ち、そこから見えるものを、ゆっくり観察し、描くことから始めようと考えた。

広重の「唐崎の夜雨」に現れる、美しく、かつ異様な、大きい黒い松に惹かれていたこともあり、まずその場所に足を運んだ。

現在の唐崎の松は、年老い、折れているのか曲がっているのか、地を這い、混乱するほど多くの支柱に支えられた複雑な姿で、湖岸の風にさらされていた。（\*註1）夕暮れ時に松がシルエットになり、そして、夜の闇に溶け込む時間帯にだけ、ようやく松の存在と交感しながら描くことができた。何度もその夕暮れ時に訪れた。

「堅田の落雁」を期待しても鴈がやって来ることはなく、「瀬田夕照」の大橋から三上山は見えなかった。結局、移動しながら三上山の姿を求めた。大型ショッピングモールが立ち並んだ「矢橋」には困惑さえしたが、それぞれの場所を何度も歩き、見て、描く時間は、その地に立ち込める「時の霧」に迷い込む貴重な体験となっていった。過去に同じ地を歩き、描いた人々とつながる静かな喜びは、現在の記憶と未来がつながること、未来が変わらずここにあることへの小さな祈りのようなものなのかもしれない。（\*註2）

「八景」と謳われてはいないが、伊吹山にも度々訪れた。標高が高くなると霧に包まれることが多い。そんな中、人々がその現象に信仰を抱く普遍を感じながら、見えるものと見えないものの境が消えた風景を歩いた。

「時の霧」を彷徨いながら見ることは、他者の時間や普遍の記憶と少なからずつながることを意味する。それは、私が、絵画に求めてきたことに近い。見ることは、時間の中にある。そして、見ることに、時間がかかる。

（\*註1）何度か通っている中で、その年老いた現代の唐崎の松は、記録上、奈良時代を初代とした3代目、約150年前に植えられたものだと知った。

（\*註2）近江の景には、常に、水という生命の根源にも喩えられるものが寄り添っていた。そのことが「過去・現在・未来を内包した霧」を発想させ、それが立ち込めて動いているビジョンに結びついたのかもしれないと、いくつかの作品が完成を迎えた頃、気がついた。



近江八景の内 唐崎夜雨（歌川広重）



2022年の唐崎の松